

「できる」「できた」を引き出す体育を。 「きょうもウキウキ! 京盲サーキット」

京都府立盲学校 (小学部)

School Data

小学部児童数	4名 (男子3名 女子1名)
小学部クラス数	2クラス
教職員数	9名(内体育専科2名)
地域のスポーツ指導者の活用(年間延べ人数)	2名

取組時の課題と目的

Plan

1 取組時の課題

本校は、視覚障害のある幼児児童生徒が学ぶ特別支援学校である。小学部児童は、言葉を頼りに学習しており、理解の程度は様々である。

体力・運動能力についても個人差が大きく、個に応じた指導内容の充実を図るとともに、集団としての活動における学習意欲をより高めていくことが課題である。

2 取組の目的

体験的な学習を通して体力の維持増進、技能の向上を図りつつ、「できる」・「できた」という感覚を味わえるようにする。また、体育の授業だけでなく、日々の授業や家庭における達成感の充実につなげる。

取組の内容

Do

● 「京盲サーキット」の実施

1 学期ごとの目標とコースの内容

(1)1学期：多様な動きをイメージさせる

- ①マット（前転・後転）
- ②三輪車・メディシンボール運び
- ③平均台・鉄棒

(2)2学期：継続した活動により体力の向上を図る

- ①マット（前転・後転）と跳び箱（開脚跳び）
- ②ロープ手繰り寄せ（台の上に座ってロープを手繰り寄せて前進する）
- ③平均台・はしご・鉄棒

(3)3学期：活動の充実を図る

- ①京盲サーキット
- ②フロアバレー
- ③サウンドテーブルテニス
- ④持久走 など

2 授業の工夫・改善

- ①障害の程度や体力・運動能力の状況は違っても、個別に対応しながら全員が同じ場で取り組めるように

する。

- ②ボディイメージができるように、様々な活動を通して身体感覚や調整力など本来もっている力を引き出す。
- ③個々の能力に合わせた課題設定を行うことにより、マット上で前転する児童やダッシュする児童など多種多様な取組となる。その際、指導者と一緒に取り組む児童もいる。

→ 工夫したこと

コース配置を固定し、見通しをもって活動できるようにした。また、課題を達成する喜びを感じさせ、より高いレベルの課題に挑戦したいという児童の主体的・能動的な態度を引き出すようにした。

取組成果の評価

Check

成果や課題については、肯定的なフィードバックを心がけることにより、児童の能動的な活動につなげた。また、課題を固定することで、児童たちは見通しをもって活動に取り組めた。さらに、自分たちで課題を工夫しようと主体的に活動する児童が増えた。

今後の課題

Action

- ①現在は、「技術が身に付いた」「能力が上がった」など教員の主観によって評価が行われている。今後は、チェックリストなどを作成し、客観的な評価をフィードバックできるように改善していく。
- ②個々の能力に合わせた課題設定と学校独自の評価方法を作成する。
- ③個人の活動によって体力の向上を図った後、集団的な活動につなげられるように授業の内容を工夫・改善していく。
- ④個々のもつ運動上の課題について全教職員で理解を共有し、学校の教育活動全体を通じた取組につなげる。

体力の向上の取組がもたらす波及効果

この取組により、「ランニングマシンを使って走りたい」「サーキットでやっている前転をもっと上手にできるようになりたい」など児童の意欲が高まり、体育の授業以外においても主体的な活動につながっている。また、新体カテストの数値にも向上が見られる。

この取組によって児童は「できる」ことが増え、「できた」ことを実感したことで、自己肯定感を高めたと考えられる。また、達成感から嬉しさを表現することが増え、児童同士の関わりが増加にもつながった。

京盲サーキット

1学期：多様な動きをイメージさせる



2学期：継続した活動により体力の向上を図る



活動を継続することで、見通しにもつながる



準備と片付けもみんなですます

3学期：活動の充実を図る



体育の授業
 ・京盲サーキット
 ・フロアバレー
 ・サウンドテーブルテニス
 ・持久走 など

系統的な取組

☆教科横断的な指導
 生活単元学習
 遊びの指導
 日常生活の指導

活動を通して

- ①イメージできる
- ②力を発揮する
- ③記録が伸びる

体力の向上



できる・できた

主体的・能動的な
 学びへ

活動の充実

全教職員で学校の教育活動全体における指導に生かす

